

令和5年度 図画工作部会研究計画

1 研究主題

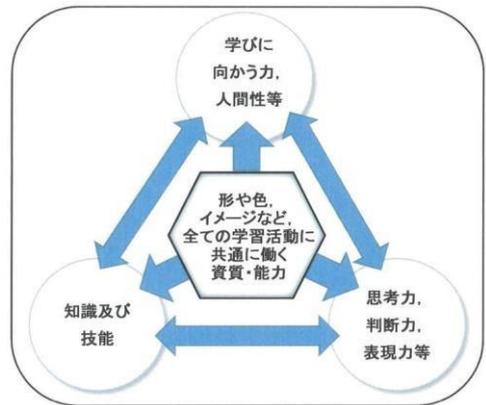
豊かにかかわり つながり 「わたし」をつくる造形活動

ー造形的な資質・能力を高め、共感し合える喜びを感じられる授業づくりー

2 研究主題設定にあたって

図画工作科は、自由に想像を広げることができる楽しさや、思いのままに描いたりつくったりすることの面白さといった、よりよい表現を求めて試行錯誤することを通して、自分らしく創造していくことのできる教科である。表現されたものを鑑賞する際には、感じ取る楽しさに気づき、その形や色、イメージのよさや美しさを味わうこともできる。これらの図画工作科の学びによって児童は、感性や想像力を十分に働かせ、自分と対象や事象とのかかわりを深め、自分にとっての新しい意味や価値をつくりだし、造形的な資質・能力を育むことができる。また、自分にとっての新しい意味や価値をつくり出すということは、生活や社会の中の形や色などと豊かにかかわる新たな自分自身をつくり出すことにもなる。この、新たな自分の見方・考え方を更新し続けることが、生涯にわたって学び続ける基礎となると考える。

図画工作部会では、これまで児童の実態に応じた「表現内容」、「表現材料」、「表現方法」と豊かにかかわることができるようにすることで、児童が表現したい思いを明確にし、その思いを実現しようとする主体的に取り組むことのできる授業づくりを行ってきた。この取組の成果を生かしつつ、学習指導要領で示されている「育成を目指す資質・能力の三つの柱(図1)」の側面から、図画工作科の指導内容を整理し、「主体的・対話的で深い学び」の趣旨を踏まえた授業改善を行い、図画工作科で身に付けさせたい資質や能力の育成に努めたいと考え取り組んできた。教師は、児童が材料と向き合い、創造的な技能を十分に発揮して表現し、達成感を味わうための支援の方法を模索してきた。表現活動では、児童同士や教師、そして自分自身との対話により、作品を見つめ直し、「つくり、つくりかえ、つくる」ことを行っている。鑑賞活動では、自他の作品のよさに目を向け、試みのよさを感じ取ることを通し、自分の見方や感じ方を広げたり、深めたりしている。



〈図1 育成を目指す資質・能力の三つの柱〉

そこで、これまでの図画工作部会の研究を生かしつつ、すべての児童の可能性を引き出し個別最適な学びと協働的な学びを具現化していくために、昨年度は研究主題を「豊かにかかわり つながり 『わたし』をつくる造形活動」とした。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を通して、つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、自分自身の造形的な見方・考え方を更新し続け、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培うことを目指し、授業実践・研究に取り組んできた。その中で、自らの可能性に気づき自分にとって新しいものやことをつ

くりだそうとすることを大切にした指導を積み重ねた。そうすることで、変容する児童の様子から、本研究主題が図画工作科における本質にせまるテーマであることが確認された。また、実践の結果、「対話的な学び」に視点をおいた授業改善の過程においては、教師からの共感的な言葉かけや児童同士の対話によって、互いの思いや意図を尊重し共感することで、自分が本当に表現したいものを表現できる楽しさを味わうことができる児童の姿を見ることができた。そして、「もっとこうしたい」、「そのためにはどうしたらいいか」などの自己内対話を深めることで、自分の考えを整理したり、自分の思いを伝えようと友達や教師と対話したりできるようになり、互いに学び合い共感し合う中で、自分の活動や作品を見つめ直し、さらなる意味や価値を見いだそうと表現の幅も広がりつつある。今後、対話などの言語活動が更に充実すれば、互いの意図や、なぜそのように表現したのか理解し、共感し合える機会が増えることで、自信をもって活動できるようになり、表現の質が高まるとともに、つくりだす喜びを共に味わうことが期待できるのではないかと考えた。

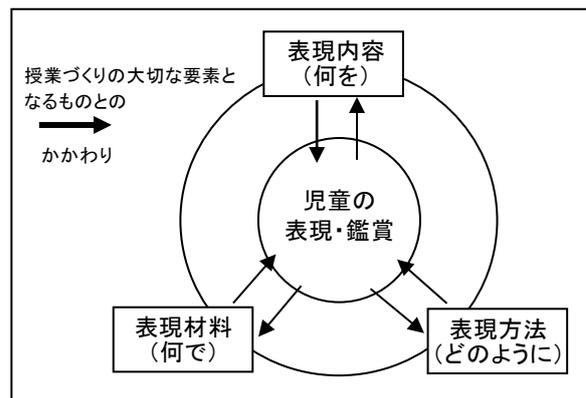
そこで、今年度は本主題を昨年度に引き続き「豊かにかかわり つながり 『わたし』をつくる造形活動」、副主題を「造形的な資質・能力を高め、共感し合える喜びを感じられる授業づくり」とし、研究の方向性や具体的な改善策を明らかにし、図画工作科の指導の充実・改善を図っていく。

3 研究主題についての考え方

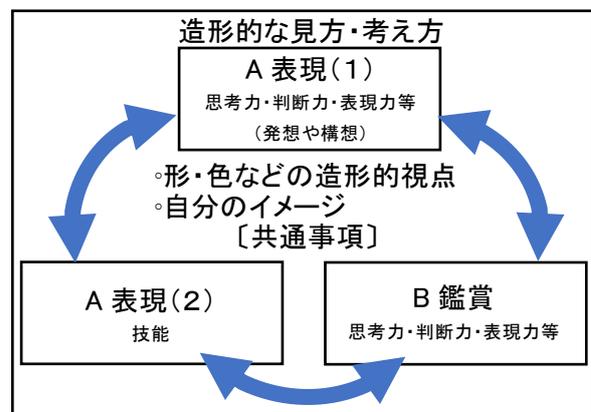
(1) 「豊かにかかわり」とは

これまで図画工作部会では、造形活動において、「表現内容」(何を)「表現材料」(何で)「表現方法」(どのように)の3つの要素を明確にした授業づくりに取り組んできた。(図2) また、学習指導要領では、内容である表現や鑑賞と〔共通事項〕とのかかわりも整理され示されている。(図3)

表現活動では、児童が3つの要素をしっかりとつかんだ上でかかわり、主体的な学びの実現を図ることにより、自らつくりだす活動が促されると考える。自分の表したいことが決まっている児童は、3つの要素を関連付けながら、主体的に製作に取り組んでいく。この時、造形的な見方・考え方を働かせながら、〔共通事項〕の視点を踏まえた授業づくりをすることで、より豊かな学習活動となる。鑑賞活動では、3つの要素と〔共通事項〕である、形や色やイメージを基に友達の作品や親しみのある作品などを見ることで、自分なりの考えをもったり、感じ取ったりしやすくなる。このようにして感じた思いは、自分自身の造形的な見方・考え方を高めることになり、自分の表現活動を広げたり深めたりすることにもつながる。



〈図2 表現や鑑賞における「かかわり」〉



〈図3 表現や鑑賞と〔共通事項〕とのかかわり〉

(2) 「つながり」とは

児童が夢中になって活動する授業とは、表現したいことを自分で見付け、表現方法を工夫し、試行錯誤を繰り返すことのできるものである。「豊かなかかわり」を通し、自分の考える形や色、イメージが具現化される中で、児童は自然と周囲とのつながりを持ち始める。活動中に交わされる教師と児童、また、児童同士の対話の中で、児童は「それ、いいね」や「どうやったの」などの自分の表現を認めてくれる言葉に自信をもったり、新たなひらめきを得たりして活動に夢中になっていく。また、友達表現から、「ああいう表現もあるのか…じゃあ、こうしたらどうだろう」と、刺激を受け、自分なりの意味や価値をつくりだすことが、新しい発想を生み出すことにもなる。時に、異学年集団で活動したり、作品を校外に展示する機会を設けたりするなどのつながりも、児童の発想や構想の能力を高める場面となる。つながりで得られる共感や称賛の言葉から、児童は表現や鑑賞することの喜びを実感することができるのである。また、材料や用具をはじめ、地域の伝統的な素材や新しい素材などの「もの」とのつながりや、身近な自然や行事、他教科などの「こと」とのつながりも造形的な資質・能力を高めることができる。

身近な「ひと」、「もの」、「こと」と自分がつながる場面を設けたり、社会とつながり協働的な活動を行ったりすることは、「思った通りできた」、「思いをうまく伝えられた」という達成感をもたせ、「自分の表現に自信がもてた」といった、自己肯定感を高める。また、「見てもらいたい」、「喜んでもらいたい」といった思いをもつことは、よりよいものをつくろうとする意欲の高まりにつながる。さらに、達成感や表現の喜び、自己肯定感が、自他の造形活動について「話したい」、「聴きたい」、「伝え合いたい」などの意欲となり、言語活動の充実へとつながっていく。このように、児童は学ぶ喜びを実感し、つながりを深めていくようにすることで、主体的に表現や鑑賞の活動へ取り組む意欲が高まる。そして、それが次の活動や学びへと結びついたり、生活や社会に主体的にかかわる態度を育成したりすることにつながる。

(3) 『わたし』をつくる」とは

図画工作科では、深い学びにつながる「見方・考え方」を「造形的な見方・考え方」と捉えている。「造形的な見方・考え方」とは、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」であり、ここに教科の本質がある。この、造形活動を通して自分にとっての意味や価値をつくりだすことは、かけがえのない自分自身を見いだしたり、つくりだしたりしていることである。学習指導要領に明記されている「自分にとって」や「自分自身」や「自ら」という言葉からも、造形的な創造活動では、まずもって、個が大切にされることが分かる。しかし、それは自分だけでよいという独りよがりなものを指しているわけではない。造形的な創造活動は、友達や身近な生活圏や社会とのかかわりによって一層満足できるものになる。教師は一人一人の児童が、自らの可能性に気付き自分にとって新しいものやことをつくりだそうとすることを大切にされた指導を積み重ねることが重要である。児童は題材を通して、それまでの自分の経験や思いや考えを生かし、創造的な造形活動をすることによって、自分自身の成長を感じ、さらなる表現の意欲が生まれる。それらが繰り返されることで、自分の造形的な見方・考え方を常に更新し続けていくことができるようになり、その結果、『わたし』をつくる」ことになる。

(4) 「造形的な資質・能力を高め、共感し合える喜びを感じられる授業づくり」とは

図画工作科における深い学びを実現させるためには、児童が「造形的な見方・考え方」を十分に働かせ、表現及び鑑賞に関する造形的な資質・能力を高めていくことが大切である。そのためには、表現と鑑賞の一体化を図った学習を充実させていく。

図画工作科において造形的な資質・能力を高めるためには、「造形的な見方・考え方」を働かせ、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を、相

互に関連させながらバランスよく育成していかなければならない。そのためには、昨年度の実践で対話を通して資質・能力を高める児童の姿からも、児童が互いに共感し合える喜びを感じ合える授業づくりが必要だと考えた。

授業を構想するにあたっては、児童の実態に応じた創意工夫のある計画的かつ継続的な年間指導計画を作成する必要がある。児童にどのような資質・能力を育成するかを考え、ねらいを位置付け、授業を展開していくのかということが大切である。教師は、児童が教師や友達と一緒に活動する中で、それぞれつくりたいもののイメージをもち、それを実現する喜びを味わうだけでなく、「つくり、つくりかえ、つくる」活動を通して、よりよくなっていく作品のよさを尊重し分かち合うなど、共感し合える喜びを感じることでできる授業をつくる。「この形や色でいいか」、「自分の表したいことは表せているか」など自分の行為や活動を振り返り、感じたり考えたりすることを大切にさせたい。さらに、互いの活動や作品を見合いながら感じたことや考えたこと、思ったことを伝え合ったり、その中で気付いた共通点や相違点のよさを認め合ったり、分かち合ったりするなどの言語活動を一層充実させていく。例えば、教師の支援、手立てとしては、活動中に「どうしてそうなの」と意図を尋ねることで、「だからこの色を使ったんだね」、「この形にしたのはそういう意味があったんだ」など児童の表したい思いに共感的な言葉かけを行う。また、児童同士のやりとりを活性化させるために、友達の表現に自然と目が行くような場を設定する。このような働きかけをすることで、共感し合える喜びを感じることでできる授業づくりにつながると考える。

4 研究内容

図画工作科における「主体的・対話的で深い学び」、そして「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた授業改善のために、次のことを研究していく。

(1) 育成することを目指す造形的な資質・能力を明確にした指導計画の工夫

①就学前教育・中学校教育との接続や系統性を踏まえた指導計画の作成

児童に育成することを目指す資質・能力を明確にし、これまでの経験を生かしながら「造形的な見方・考え方」を働かせ、資質・能力を向上させることができるような題材を選択・配列し、適正な評価を考慮した題材の指導計画を作成する。その際、児童の学習意欲を高めるために発達段階に応じて、系統性を踏まえた学びが展開できるよう工夫する。そして、令和5年度四国造形教育研究大会を見据えて、校種間連携を推進する。

②教科横断的・合科的な指導計画の作成

指導計画の作成の際には、「A表現(1)ア、イ」と「A表現(2)ア、イ」、また「B鑑賞(1)ア」のバランスや「[共通事項](1)ア、イ」の視点から題材の指導計画や内容、方法を検討し、目標の設定や具体的な指導と評価を考えることにも留意していきたい。また、地域の実情や各教科等との関連を意識した題材の設定を行うことも大切である。

さらにSDGsの視点から、教科横断的な学習を通して深い学びにつなげることも考えられる。他教科等と関連して「平和」、「人権」、「自然」などに関する身近な諸課題について関心を高めるとともに、教科横断的な指導計画の作成やカリキュラム編成等をする。例えば、廃材や地域の自然材を活用した題材を考案したり、指導計画に配置したりすることで児童のSDGsへの関心を高めつつ、新しい意味や価値のある活動や表現に結びつけたい。それから、RPDCAサイクルを意識し、題材を扱う順序や幅のある配当時数増減などを工夫し、成果や課題を次の実践に着実に生かしていくことができるようにする。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

①「主体的・対話的で深い学び」の充実

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善とは、表現及び鑑賞の活動を通して、児童一人一人が「造形的な見方・考え方」を働かせながら、造形的な資質・能力を関連させた学習展開を図ることである。教師は児童の表現欲求に応える、必然性のある題材を設定することや学習の見通しを立てられるようにするなど、児童自らが表現や鑑賞の活動に取り組むことができるような授業づくりを目指す必要がある。表現と鑑賞を一体化させながら、材料と対話し、自分と対話し、友達や教師と対話できるようにしていくことで、児童は新たな意味や価値をつくりだすことができる。また、多様な学習活動を組み合わせて授業を組み立てていくなどの工夫を行って、主体的な学びにつなげていく。これらのことから、児童が主体的に表現活動に取り組もうとする意欲が高まるとともに、造形活動の充実が期待できる。更に、児童は「つくり、つくりかえ、つくる」という学習過程を通し、豊かに発想・構想したことを、系統的に身に付けた技能を発揮し、新たな発想を得る中で、自分のイメージを作品として表現していく。そして、児童が自分の成長やよさに気付くことができるように、振り返りの場面を設ける。この繰り返しから深い学びを体得することとなる。

「造形的な見方・考え方」ができるようにするためには、授業の中に話し合うなどの対話を位置付けることも大切である。その際、形や色などの造形的な視点から、自分の考えなどを広げたり深めたりできるように留意する。「この形や色でいいか」、「自分の表したいことは表せているか」など、自分の表現のねらいや行為・活動を振り返り、感じたり、考えたりする場面（自己内対話）を大切にする。そして、互いの活動や作品を見せ合いながら、感じたことや思ったこと、考えたことなどを話し合ったり伝え合ったりする場面から、言語活動を充実させることが大切である。話し合い、発表会等、多様な方法で他者と対話する場面を題材全体や授業の中に明確に位置付け、計画的、継続的に展開する。さらに、教師との対話、児童同士の対話だけでなく、保護者をはじめとする様々な人と活動したり交流したりする機会を設定することができれば、児童はより表現内容への新たな意味や価値をつくりだしていくことが可能になり「造形的な見方・考え方」が深まっていく。

②造形遊びの充実

造形遊びは、児童が材料や場所などに自ら進んで働きかけ、自分の感覚や行為を通して捉えた形や色などから自分なりのイメージを基に発想や構想を繰り返し、思いのままに技能を働かせて表現する活動である。絵や立体、工作に表す活動のように主題や内容をあらかじめ決めるものではなく、児童が材料や場所、空間などと出会いかわり、自分で目的を見つけて発展させていく学習活動である。身近にある自然材や人工の材料を生かした題材を考えたり、発達段階や学習活動の規模に応じた場所で展開させたりすることで、造形遊びの充実が期待できる。

造形遊びは、児童が表現する過程そのものを楽しむ中で「つくり、つくりかえ、つくる」という学びの過程を経験できる重要な活動である。友達とかかわり合いながら活動することが主になるため、主体的・対話的な学びが展開しやすいだけでなく、既習の経験や技能を生かして、新しい試みや価値を生み出すことができるので、深い学びにつなげていくこともできる。今一度、造形遊びの価値を確認し、どの学年でもそれぞれの発達の特性に応じた授業を実施することが大切である。

(3) 指導と評価の一体化の工夫

学習評価では、児童の学習状況を的確に捉え、自らの学びを振り返り、次の学びに向かうことができるようにするとともに、教師が指導の改善を図ることにつなげることが重要である。図画工作科においては、完成された作品だけではなく、児童一人一人が表現及び鑑賞の活動の一連の

学習過程の中で、育成を目指す資質・能力をいかに発揮しているのかを適切に評価することが求められる。事前に児童の思いや考えをつかんだ上で、目指す姿を設定し、授業の中でその姿を意識しながら声をかけたり、共感したり支援したりする。このことを通して、造形活動への意欲、資質や能力を高める指導につなげていくことが重要である。活動中の姿を評価することは、児童の表現の意図を理解することにつながり、指導（支援）する際の手がかりとなる。教師は、指導と評価が常に一体となっていることを認識しておくことが大切である。

図画工作科の「つくり、つくりかえ、つくる」学びの過程はRPDCAサイクルで回る。児童の実態・先行経験（R）⇒育成を目指す資質・能力を獲得する題材設定（P）⇒創造的な技能を生かした表現活動（D）⇒表現活動の振り返り・表現及び鑑賞の一体化（C）⇒新たな表現活動（A）となる。指導の在り方を常に確認し、児童一人一人が表現する喜びを感じることができるようにするため、教師は児童の表現や活動をしっかりと見取り、表現欲求に応えるべく個に応じた指導や、次の表現につながる適切な評価を行うことが求められる。

また、児童自らが学びを振り返り、次の学びへ向かうことができるよう、自他の作品や取組、行為のよさについて記述したり、話し合ったりする自己評価や相互評価などを行う場を設定することも大切である。教科の特性として、個々の活動が多様かつ同時進行していくため、ポートフォリオやデジタル記録、ワークシートの活用など、多様な評価方法を組み合わせることで、指導改善、学習改善につなげる評価を行う必要がある。児童のよさを認め、表現及び鑑賞の活動への自信と楽しさ、喜びを味わわせ、更なる表現活動への意欲をもたせるなど、指導に生きる評価方法を工夫していくことが大切である。

（４）ICT（一人一台端末等）の効果的な活用

図画工作科においては、実際に材料や用具などに直接触れ、手や体全体の感覚などを働かせつつくったり表したりすることを最も大切にしている。そのことを踏まえた上で、ICT機器は学習のねらいに応じて、必要性を十分に検討し活用することが大切である。例えば、デジタル教科書を活用して、動画のコンテンツなどを視聴することで、効果的に技能指導を行ったり、個別に学習を進めたりすることが考えられる。また、一人一台端末を用いて、自分たちの活動や表現を撮影し、対比したり共有したりすることで、新たな発想や構想をすることのきっかけになる。納得がいくまで自分がよいと思う向きや角度から写真を撮るなど試行錯誤することができるので、自分自身の造形的な見方・考え方を再認識する機会ともなる。記録写真や振り返りなどを蓄積していくことで、自分の感じたことや考えたこと、表したいことや表し方がどのように変わったのかといった自分の学びの変容を自覚したり、次はどうしたいのかという学習の見通しをもったりすることができる。鑑賞活動においては、美術館等が提供している美術作品のデータ等を拡大して、形や色、イメージだけでなく、筆のタッチや質感、スケール等を感じるなどの活動にも活用できる。

5 研究方法

- （１）本年度は研究大会の会場校である、阿波市久勝小学校を中心とした研究組織をつくり研究計画を立てる。また、発表担当の各郡市の研究組織と協働しながら事前研究や授業実践を行い研究内容の解明を図る。

阿波市久勝小学校では、6公開授業を実施する。

造形遊びをする活動部会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 造形遊びをする活動を通して、活動を工夫してつくることができるようにするためにはどうすればよいか。 「知識及び技能」 ○ 造形遊びをする活動を通して、造形的な活動を思い付くことや活動の仕方について考えることができるようにするためにはどうすればよいか。 「思考力・判断力・表現力等」
絵や立体，工作に表す活動部会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 絵や立体，工作に表す活動を通して、表し方を工夫することができるようにするにはどうすればよいか。 「知識及び技能」 ○ 絵や立体，工作に表す活動を通して、表したいことを見付けることや、表し方について考えることができるようにするにはどうすればよいか。 「思考力・判断力・表現力等」
鑑賞活動部会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 鑑賞をする活動を通して、造形的な魅力や造形的な表現の内容、方法、意図や特徴、表し方の変化などについて感じ取ったり考えたりし自分の見方や感じ方を広げたり深めたりするにはどうすればよいか。 「知識」「思考力・判断力・表現力等」

※上記に加えて、[共通事項] (1) は、すべての部会に関連付ける必要がある。

(2) 各郡市研究会は、研究主題の解明に向けて共通理解を図り、研究や授業実践を行う。

(3) 研究成果をまとめ、研究集録 (第60集) を発刊する。

引用・参考文献

- 文部科学省「小学校学習指導要領 (平成29年度告示) 解説 図画工作編」平成29年
 文部科学省「小学校学習指導要領 (平成29年度告示) 解説 総則編」平成29年
 文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 令和2年3月
 文部科学省「小学校図画工作科の指導におけるICTの活用について」 令和2年6月
 株式会社ぎょうせい「平成29年改訂 小学校教育課程実践講座 図画工作」奥村高明 2018年
 明治図書「小学校図工 指導スキル大全」岡田京子 2019年
 東洋館出版社「初等教育資料 2021年1月号・11月号 2020年10月号」
 東洋館出版社「子どもスイッチ ON!! 学び合い高め合う『造形遊び』－豊かな学びの世界がひろがる図工の授業づくり－」岡田京子 2015年
 中央教育審議会『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申)』 令和3年1月